岬　中上健次

中上健次

岬

文藝春秋

著者略歴

昭和二十一年八月、和歌山県新宮市に生まる。県立新宮高校を卒業。羽田空港の貨物輸送会社に勤務。退職して、現在に至る。昭和四十八年、「十九歳の地図」を『文藝』に発表、第六十九回芥川賞候補に推さる。著書に、『十九歳の地図』『鳩どもの家』がある。

岬　八八〇円

一九七六年二月二十五日　第一刷
一九七七年十二月二十五日　第八刷

著者　中上健次
発行者　樫原雅春
発行所　株式会社文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町三
電話(〇三)二六五-一二一一

本文印刷　理想社印刷
附物印刷　凸版印刷
製本所　矢嶋製本

万一、落丁乱丁の場合はお取替致します

© Kenji Nakagami 1976

Printed in Japan

目

次

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

黄金比の朝　七
火宅　七一
浄徳寺ツアー　一二五
岬　一六三
後記

裝幀司修

岬

黄金比の朝

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

1

眠りが固まらなかった。眼窩の奥、頭の中心部に茨の棘でさしたような甘やかな痛みがあった。蒲団を蹴り払い、声をかけて起きあがった。裸の上半身が寒気でたちまちはっきりわかるほど鳥肌がたった。ぼくは胸のちいさな薄茶色の乳首の周辺にできたそれをみながら、もういちど眠ることを努力してみるべきか、それともこのままあきらめるものか、思案した。眼が痛かった。壁に貼ったチェ・ゲバラの追悼集会のポスターに、窓の一番上の透明硝子を通して射し込んでくる午後の黄色いさらさらした光があたり、ポスターの下方にあるチェ・ゲバラ日本人民追悼委員会と書かれた黒の文字を眩ゆく照らしていた。そのポスターをいつ、誰にもらったのかも、ぼくは忘れてしまっていた。チェ・ゲバラのひげづらを描いたそれは、ぼくの四畳半の壁の一部分として自然にみえた。外から、子供の泣き声と、女の荒げた声がきこえていた。ずいぶんながい間、若い女と年老いた女が諍いをしていた。ぼくの筋肉、と不意に、自分の寒気で張りつめた皮膚の粒つぶをみながら思った。いまのアルバイトのような力仕事をこれから三年か四年やっていると、

筋肉は固まり、盛りあがり、どこからどうみても労働者そのものの体格好になるのだろう。ぼくは、立ちあがった。寒さが立ちくらみのように襲ってきた。あわてて服を着たかったが、ぼくはその軽佻浮薄なぼくの心を律して、眠る前に折りたたんでおいたシャツとズボンとジャンパーを、わざと自分の心を試すようにゆっくりと丁寧に着た。

ぎしぎし鳴る廊下を歩いて、ぼくはつきあたりの便所に入り、小便した。便所の土埃のたまった窓をあけると、小学校の鉄筋校舎に掲げられた日の丸の旗と、大地にではなく青い空にむかって根を張ったような、リンパ腺の解剖図を想わせる、裸のケヤキがみえた。いつから旗日でもないのに日の丸が掲げられるようになったのだろうかと思い、不意に、小学校の時担任だった女教師が、「よくないことです」と日の丸の旗のことを泣いて非難していたことを思い出した。小便をし終り、炊事場の流しで手をあらい、それから冷たいきよらかな水を飲みたくなって、蛇口に口をつけて水を飲んだ。炊事場の窓からは、裏のアパートと、くずれおちそうな板塀と、駅の方面の屋根が三つほどみえた。

ノックをしないでいきなりドアをあけた。斎藤は口をあけ、蒲団からパンツ一丁の、なま白い足を出して眠りこんでいた。「おい」とぼくは、斎藤の枕元に立って言った。「起きないか、起きて風呂にでも行かないか」斎藤は口を閉じ、ううとうなり声のようなものを出し、頭と足を蒲団の中にもぐりこませた。ぼくは、海老の形に体をおりまげているらしい斎藤の蒲団をみながら、花模様のクッションを敷いた椅子に腰かけた。壁にギターがかかっていた。金属のこすれあうような頭にひびく声を出して調子っぱずれにうたう歌手の笑顔のグラビアが、机の前に貼られ、その脇に、石母田＋20、吉村＋55、ケン＋105と書いた麻雀の点数なのだろう紙切れが画鋲でとめら

れ、そして保健飲料の会社名の入った今週の格言が釘でひっかけられていた。《他人を嘲笑う者は己れが嘲笑われ、他人を尊ぶ者は自分が尊ばれる》雑然とした部屋だった。緑色の柔らかい生地のカーテンが窓にかけられていた。斎藤の枕元には、マンガ週刊誌と、『短期決戦・物理のテクニック』が置かれてあった。「よお、風呂にいこうぜ、明日、おまえも休みだろ」斎藤は返事をしなかった。

そのままアパートの外に出た。光が睡眠不足の眼に痛く眩しく、ここ一カ月ろくなものを食べていないし、夜勤と受験勉強のため疲れが骨の中心にまできているらしく、眩暈がした。春に変りはじめたばかりの季節の風は、ここち良く冷たかった。どこへいこうか？　と迷った。黒のジャンパーのポケットに手をつっこむと、中に英語の単語カードがあった。abandon 棄てる。放棄する。＝forsake ぼくは、まるでその単語カードをみつけ日の下にさらしたことが、今日一日の禍々しさを予言しているとでも言うように、それをすぐさまポケットにねじこんだ。アパートの隣の家の松根善次郎が、道に縁台を置いて並べた一様にいびつにひんまがり幹の部分が茶っぽくなった植木鉢に、綿入れを着こんだ腰をかがめ、ひしゃくで丁寧に水をやっていた。葉がすっかり落ちた植木は、植物という類のものではなく、いくら水をやっても光をあててもけっして葉をつけることも花を咲かせることもない針金の類、釘のたぐいに見えた。もう親子喧嘩は済んで、今度は盆栽の手入れか、と思った。昼日中から、ののしりあっていたのだった。一回目、ぼくがめざめた時に、窓をあけてのぞくと、ののしりあっている当の娘がつれてきたのだろう、ヤクザか水商売かの男が、電柱の脇にしゃがんで、ちっちっと舌を鳴らして仔犬を呼んでいた。「おまえは、お父さんにむかってなんてことを……」そう言うのは松根善次郎の女房すみのであり、そ

の声にかぶせてそんなもっともらしい了見などこの家に通じるものかと、「お父さんなんてどの顔で言えるのさ、わたしは自分の洋服とりにきただけ」と声を荒げ、ずっと昔から親でもないし子でもないと言いたてるのは、娘の順子という派手な服の女だった。家の中で、叫びたてののしりあっているというのに、男は、尻尾をふって首のほうからすりよってきた仔犬を撫ぜさすり、抱きあげ、顔をなめられてわらっていた。仔犬はどこの家のものかわからないどぶ川のこちら側、あやめ橋のこちら側のこの近辺を、尾をふってうろつきまわっている犬だった。このようなてあいの無節操な犬はどこの町でもいた。まったくはた迷惑な家だった。

あてもなく駅まで歩き、あてもなく電車に乗って予備校のある駅で降り、予備校まで歩いた。予備校の前で黒いラッカーでヘルメットを塗りつぶした五人の男が、ビラを配り、カンパを募っていた。急激に温度が下がりはじめたのがぼくにはわかった。ジャンパーのポケットに両手をつっこみ、体をまるめ、道路に面した校舎の壁につけられた硝子ケースの中に貼ってある二月初めの模擬試験の順位を、ぼんやりとみていた。五四八点高品秀一（ラサール）からはじまり、百位まで書きあげられている。硝子にぼくの顔がうつっていた。この模擬試験は、ぼくも斎藤も受けなかった。ラサール、灘、西と高校の名前を見ていて、不意にぼくは、自分の高校を思い出し、兄をおもいだし、母をおもいだした。インバイノクサレオマンコ。しゃらくさいじゃないか。予備校の五階建の屋上にいこうとして予備校生が出たり入ったりしている玄関で、黒ヘルメットからガリ刷りのビラを渡された。〈再度、武装した軍隊の創設〉とあり、共産主義武装軍団とあった。兄の所属する党派ではなかった。息苦しかったがそれがいまのいま、このぼくに課せられた責務であり賭けだと思い、じぐざぐ形になった階段を休まず五階まで一気にかけあがった。息ができ

なかった。大きな夕陽がみえた。それは血膿の色だった。屋上に張られた太い金網に手をかけて下をしばらくみつめ、それから、いまさっきもらったばかりのビラをポケットからとりだし、ちいさくちぎって一片ずつ手を離して棄てた。まったく悠長な暇つぶしだった。紙片は、風に乗って蝶のようにひらひら舞いながら下に落ちる。

夕飯を食べて部屋にもどった。兄がいた。兄は、ぼくの蒲団をおりたたみもしないでくるくると壁にまるめ、それをソファがわりにしてもたれこみ、斎藤相手に競馬のはなしをしていた。兄はぼくの顔をみるなり、「どこをうろついてるんだ、勉強もしないで」と言った。斎藤は兄に寝ているのを無理に起こされたためか、呆けた顔でぼくをみた。「どけよ、おれの蒲団にもたれたりするな」と、ぼくは兄の前に立って言った。兄はぼくの腹だちのようなものを察したのか、起きあがりあぐらを組んで、「しばらくなあ、ここに潜らせてもらうから」と断定口調で言った。「ひどいものさ、別件でどんどんパクりやがる」「そうらしいですねえ、ぼくの高校の時の友人のそのまた友人が、一年ぐらい前のおでんの食い逃げでパクられた」斎藤は言い、兄はいったいなにをこの男は言いだすのだろうかというふうな顔をして、ぼくをみ、苦笑した。「破廉恥罪ってわけか」

「破廉恥罪だけど、なにも一年も前の食い逃げつかまえなくっても良いのに、なにか裏にあるなって思ってると、やはりツリー爆弾のことばかりきくんだってさ。リストをつくってるらしいんですよ」

「しつこいからなあ、あいつら」兄は言った。兄は蒲団の脇においた黒の模造皮のショルダーバッグをひきよせ、チャックをひらき、中からチョコレート四箱とコンビーフ二個、さけのかんづめ一個を出し、「ほら、東京のお土産」とわらった。「おまえまでが東京に来てて、東京のお土産もなにもないけど、おまえ、おれが帰るたんびに、東京のものだったらなんだって良い、よこせと言ったろう」兄はそれから斎藤にむかって、「おれたちほんとうに仲が悪いんだよ、それもこれもこいつがこんな性格だから」となれなれしく言い、まだつっ立っているぼくを見あげた。ぼくは、自分のいまの感情を整理できないで、やせこけた兄の眼の、いままでぼくなどにみせたことのない哀れみを求めるような柔らかい色を読みとりながら立っていた。兄がこの部屋にあらわれ、これから当分潜るということは、厄介であるが、身より一人ないこの都会で血をわけた兄弟がぼくのすぐそばに来たということでもあり、それはなんとなく心づよく、楽しげでもあった。

「いっしょうけんめい、おまえのためにパチンコやって、東京の土産とってきたんだぞ」

「おれはそんながきじゃないよ」吐き棄てる口調だった。兄は気まずげにわらい、ぼくの蒲団の上にまた体をもたせかけ、しわくちゃのズボンのポケットから煙草をとりだし、一本口にくわえて、「マッチ、マッチ」と自分のポケットのあちこちをたたいて捜した。上衣の左ポケットに入っているらしく、おっ、と声をたて、手をつっこんだ。「なんだよ、こんなもの入ってるよ」と兄は、内ポケットから桃色の柄の歯刷子をとりだし、わらい顔をつくって、その歯刷子が、ぼくの感じているとまどいや不機嫌を一挙に打ちくだく手品の種だというふうにみせた。斎藤は兄の手品に乗ってわらった。ぼくはわらわなかった。おもしろくもおかしくもない。それは子供のころから兄が何度もくり返しくり返しつかった手だった。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo